

冒険と社会批判のはざま

—— フェルプス農場の「誤魔化し」とジム

杉山直人

農場場面への疑問

ヘミングウェイの有名なコメントは、『ハックルベリー・フィンの冒険』（1884・5、以下『ハック・フィン』）について語るさいの枕詞（まくらことば）と化した感がある。現代のアメリカ文学はすべてこの小説から始まると賛辞を送るいっぽうで、しかしジムが「子供たち」（“the boys”）から盗まれたところで読むのを止めないといけない、と文豪は言う。そこが小説のほんとうの終わりで残りは誤魔化しだ、と。（Hemingway 22）ジムが二人組に奪いさられたのは、ハックからである。だから思い違いがあるが、それにしてもヘミングウェイの言葉は、この作品を考えるときに現代の読者なら誰も感ぜざるを得ない「肩すかし」を言い当てて妙ではある。1935年のことだった。

フェルプス農場での物語展開のなにが問題なのか。三つあろう。

(1) 最大の疑問は、トムが「冒険」を味わうために、自由黒人たるジムを再度「解放」しようとしたことである。自由州に逃亡し、妻や子を買戻していっしょに暮らすことを夢み、その実現を切望したジムにはいかにも酷である。娘にたいして自分がふるった暴力に悔悟の涙を流し、そのぶん余計に家庭への思い入れを語ったジムと真面目につきあってきた現代の読者なら、トムの「奴隷解放ごっこ」に訝しさを覚えざるをえない。

(2) トムへの疑問はハックへの疑問でもある。なぜ彼はトムの「冒険」に従ったのか。「解放ごっこ」をトムが提案したとき、ハックは「さすがにトムだ」と感心したことになっている。ところが読者にすれば、これはうさん臭い。トムのいう冒険の正体を物語の出だして、ハックはすでに見破っていたのだから。それが旧世界の小説や物語を範にとった模倣にすぎず、現実遊離のおとぎ話であることを悟ったはずだから。ラクダに乗った隊商や財宝といっても、日曜学校の生徒や、彼らの人形と賛美歌集だったことを目の当たりにしたはずではないか。『アラビヤン・ナイト』よろしくブリキのランプを擦っても御殿は建たないことを悟ったハックは、自分自身の考えに従う、と明言した。ヨーロッパモデルからのアメリカ独立宣言である。現実の経験に基づいて判断を下す土着のリアリストたるハックの誕生を読者は確かに目撃した。

町を離れ自然児に戻ってゆくハックは、上品で堅苦しい生活に親しみ始めていた自分を、否定するようになる。共同体中心部への帰属を指向し始めていた彼の生活ベクトルは反転し、共同体外部へと向かい始めた。そうした準備を経たうえでジムとの出会いがあり、奴隷体制下で個人と社会はどう関わっているのか、というモチーフがトムの再登場にいたるまで展開された。ジムにどのような態度と行動を採るべきかをめぐって揺れ続けるハックの心の襞が、映し出されてきた。だが、ボスとしてトムをハックが受け入れたその瞬間、ハックの自我の揺れは消える。奴隷制社会の道徳に従い、良家の子たるトムがジムを「解放する」のは良くない、止めたほうがいいと御注進にあがる、友情に篤い優等生ハックの再登場となる。これではまるで物語第一ページへの回帰である。

(3) 最後にジム。ごく最近上梓された研究書のなかで、保守派の論客 Stephen Railton が「物語にはまるで二人のジムがいるようだ」(*Mark Twain : A Short Introduction* 65) と述べている。農場でのジムが、それまで少年と二人で旅をしていた頃の彼のイメージと合致しないことを怪しんだ言葉なのだが、至言だろう。こうした指摘は実は古くからある。*Satire or Evasion: Black Perspectives on Huckleberry Finn* (以下『諷刺か逃避か』、1992) に収録された Chadwick

Hansen や Leo Marx の意見が代表的だろう。孫引きになるが紹介すると、「この（＝農場での）ジムは、もっとも低い役割から最高の役割へとトウエインがあればほど注意深く発展させてきた登場人物ではなくなっている。このジムは自らの威厳をすべて失い、苦痛も感じず、新たにページをかさがせてくれるだけの人間とは言えない生き物（“subhuman creature”）でしかない。このジムはのっぺりとした安っぽい（ステロ）タイプでしかなく、『ハック・フィン』の結末がどの程度失敗しているかはかる物差しである。」（Mary Kemp Davis 81）そしりと失望がないまぜとなって、農場でのジムがやり玉に挙げられる。生みの親たるトウエインがジムの裏切った、という苦々しい思いである。

農場場面をめぐる作家への非難は、ヘミングウェイの苦言と同根だろう。文豪の言葉を突き詰めたものとなっているところが異なるが。公民権運動以降顕著になった人種問題は正への動きが高まり、それがトウエイン批判に反映されたのである。「ニガー」という言葉が繰り返されるから、この小説を思春期の子供たちに読ませるにはいけない、と考える人たちの主張とも、それほど隔たってはいないかもしれぬ。フェルプス農場での変調は、こうして時代と作家と読者がおりなすトライアングルを考える良い機会となる。

先走って言えば、川を下るジムと農場での彼が引き起こす断絶は、解放民問題をめぐる社会批判小説と娯楽性を旨とする冒険小説との接点であり、両者のバランスをとりながら、物語を仮の終結に導くための苦肉の策だった、と私は考える。ここで注意すべきは、作品発表当時アメリカ社会に蔓延していた人種的偏見にたいする作家の曖昧な姿勢である。小説ではバーレスクのオブラートに包みつつも社会諷刺を展開するかと思えば、いっぽう聴衆相手の朗読会では社会諷刺の棘を抜き取り、悪ふざけに近い笑いをのみ前面に押し立てる、この作家の割り切りの良さである。あるいは TPO をわきまえた「大人の知恵」と言うべきか。解放民の地位改善への情熱を失い、その努力を放棄したアメリカ社会への批判を確かにいっぽうで展開しながら、同時に読者や聴衆の人種的偏見を知り抜き、あたかもそれにおもねるかのよう解放民を哄笑の対象とする、この作家の優柔不断である。

執筆時期とジムの二面性

最近のトウェイン研究成果のなかで見逃せないもののひとつが、2003年にUCLA出版局が上梓した新版『ハック・フィン』（以下、新版）だろう。「盛りだくさん過ぎる」（『マーク・トウェイン—研究と批評』第三号 93）という悲鳴が我らの同輩からあがるほど、詳細な情報が盛り込まれている。作品研究の要（かなめ）のひとつである執筆時期についても、必ずしも新情報ではないにせよ、旧版（1988年刊）より精度の高い研究結果が得られた。言うまでもなく、1991年に小説前半の肉筆原稿が発見されたからである。1912年のペイン、42年のデ・ヴォート、58年のウォルタ・ブレアの成果を受け継ぎ、もっとも丹念な創作時期研究と考えられたブレア・フィシャ共同による88年版の研究結果も補足修正されることになった。作品完成に至るまでに七年を要したこと自体が揺るいだのではない。執筆時期が1876年、80年、83年の三期に分けられるのも従前通り。ただし、新しい研究のおかげで作品のどの部分が三つの創作時期のいずれに属するかを、章単位でいっそう詳しく確認できるようになった。

そこでジムが登場する場面（章）について創作時期を調べると、興味深い事実が浮かび上がる。トムとハックによる農場でのジム救出劇（第33～43章）と、トンチ問答でジムがハックを打ち負かす場面（第14章）とは、どちらも1883年6月から9月までに執筆された、ということである。ジムのめぐる議論で頻繁に引き合いに出され、さきほどのレールトンにあったような、ジムの二面性や矛盾が指摘される有力な論拠となる部分が、双方とも、実は同時期に執筆されていたことが確認された。猩紅熱のために耳が聞こえなくなっていた娘に暴力をふるった自分をジムが責める（第23章）場面も、同じ執筆時期に属する。ジムの考えるさいの大事な章がこの時期に生まれたことになる。実際、作家の創作意欲は83年夏の数ヶ月旺盛をきわめ、第12章のなかばから問題の第14章ばかりか、第22～43章までをも含め、小説のほぼ半分に相当する分量の執筆へとトウェインを向かわせた。作品後半部を作家は一気呵成に書き上げた。

第14章は有名な第15章への伏線となる章である。濃霧で離ればなれになったのち、ハックと再会できたジムは大喜び。そのジムをハックは「夢さ」とからかう。悪ふざけに気づいたジムは、友人をからかう人間はクズだと怒り、ハックを逆に恥じ入らせる——これが15章である。ハックとの逃亡中、ジムは娘や妻を思う家庭人、ハックの保護者たる父など、さまざまな顔を見せるが、第15章での彼は人倫を説く人生の師としてハックに対峙する。大いなる存在として少年を圧倒する。奴隷制社会の枠組みのなかでは起こりえない、両者の立場の逆転が実現する。

直前の第14章で議論に負けたのが、悪ふざけの直接のきっかけだった。「言っても無駄になるだけと分かった——黒んぼにゃ議論の仕方なんか教えられねえ。そんでやめた。」(98)苛立ちと悔しさをうかがわせるハックの言葉で第14章は終わる。それは意趣返しを予期させるわけで、案の定だまされたとも気づかず、夢の「お告げ」を得々としゃべるジムの「愚かしさ」を暴き、意地悪く笑うハックの御登場となる。第14、15章はこうした、一人の人間としてのジムの自由闊達な姿と、その彼との「議論」に負けた腹いせに、社会の価値観にしたがって、ニガーは「とんまで迷信深く頑迷だ」とするステロタイプの枠組みに、彼を押し戻そうとした白人少年の報復と失敗を語る。

執筆時期に戻って考えよう。第15章は76年7月から9月にかけて、つまり上にあげた三期の執筆時期のなかでは最も初期の第一期にすでに書き上げられていた。この時期には第1章から12章のなかばまでと、第15章から第18章はじめまでを書き終えたことが分かっている。だから執筆順序から見れば、第14章と第15章は順番があべこべで、しかも両者のあいだには6年の時間が経過している。76年に執筆済みの第15章で、トウェインは作品のなかでももっとも印象的な場面のひとつである、成熟した個、ハックへの「師」としてのジムを描いた。ジムのそうした側面を補強するため、作家は6年後の83年になってハックの悪ふざけの遠因を第14章で付け加えたのである。

だが83年に付け加えられたのは、議論でハックを打ち負かすジムの機知ばかりではなかった。いつでも逃げ出せるはずの小屋から脱出するため、蛇や蜘蛛を飼い、

ネズミにかまれた傷口から流れ出る血で日記を書き（第 39 章）、石臼に銘を彫り込み、挙げ句の果てはタマネギを使って涙を流し、その涙で花を咲かせる（第 38 章）のを承諾するジムも書き込まれた。人倫を説いたジムの、農場での彼の行動に見つけたすのは確かに難しい。「ふたりのジムがいるようだ」というレイルトンの批判ももっともに見える。ただし、いま検討した第 14、15 章の執筆時期とフェルプス農場の執筆時期とを突き合わせて考えると、ジムをめぐって現代の批評家が甲論乙駁する彼の「二面性」をめぐの問題に、作家自身はそれほど関心を払っていたようには思えないのである。

時代とジムの役割

『ハック・フィン』が発表された 1884 年当時、アメリカ社会で解放民がどのような状況に置かれていたかは、第 1 章で概説した。他の章でも折に触れて語ってきたとおりである。1877 年には、南部に残っていた最後の連邦軍が撤退して「再建期」が終わる。だが、南部は過去の暗い時代に後戻りしつつあった。奴隷制こそ姿を消したが、代わってシェアクロッピング制度が姿を見せつつあった。大半の解放民は生活費を高利で借金し、特定のプランテーションに縛り付けられるか、渡り歩く暮らしだった。南北戦争直後のブラックコードは姿を消したが、教育機関や公共輸送機関では人種分離が進みつつあった。共和党ばかりか国民も解放民をめぐる南部の情勢悪化に冷淡だった。解放民の夢は裏切られた。

人種をめぐる再建期以降のこうした時代背景や社会情勢を、物語の流れと重ね合わせて読み取るとは、いまでは『ハック・フィン』批評の趨勢といってもよい。『諷刺か逃避か』には、そうした立場から、いくつかの論考が角度を変えながら収録されている。簡単に言ってしまうと、いちど解放されたジムがふたたび奴隷に引き戻され、農場ではほかの白人ばかりか、トムにまでも「奴隷」たることを強要されるという物語の展開は、奴隷制時代と再建期以後の時代とを重ね合わせたものである、という解釈となる。解放前の奴隷（ジム）の背後に解放民がすかし見える、という

構図である。だから、そうした立場にジムを置いたトウェインは解放民にたいするアメリカ社会の無関心と非情を諷刺した、ということになる。ただし、二つの時代を重ね合わせてこの作品を読むというのが定着したのは、ごく最近のことである。小説が世に出て一世紀を経て、はじめて認知されるようになった読み方なのである。

作品発表当時、ジムをめぐる代表的な意見を発表の翌年と、その二〇年後の書評からひとつずつ紹介する。前者は後にコロンビア大学で教えることになったブランド・マシューズがイギリスの『サタデー・レビュー』誌上で、後者はプリンストン大学で教えていたT・M・パロットがハーパーズから出版された *Booklover's Magazine* に書いたもの。

ジムは見事に描かれた人物である。しっかりした素晴らしい黒人像が最近のアメリカ小説には少なからず見受けられるが、そのなかでは『グランディシム一族』に登場するケイブル氏のブラ・クベがおそらく最もたくましく、(チャンドラー) ハリス氏のミンゴーやアンクル・リーマス、それにブルー・デーヴがもっとも優しいだろう。こうした黒人たちとジムは優劣がつけがたいほどである——南部黒人の本質の単純さ、優しさ、寛大さがトウェインのおかげでジム以上に見事に提示されたことはない。(『サタデー・レビュー』、1885年1月)¹⁾

『ハックルベリ・フィンの冒険』というこの傑作で注目すべきは性格描写の才である。思うに、オロンノコからアンクル・リーマスに至る英文学のなかでは、ジムが最良の黒人奴隷像だといっても過言ではない。『アンクル・トムの小屋』に登場する人物たち——臨時に顔を黒く塗った白人紳士——とジムを比べれば、想像力の単なる産物にすぎぬ作品と熟知に基づく作品との違いが理解できる。奴隷の無知、迷信、謙遜、優しい心、さわやかな敬虔さがこれほど生き生きと描き出されたことはない。(『愛書家

1) *Saturday Review* (31 January 1885) 153-4; reprinted in *Mark Twain: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) 124-5.

雑誌』、1904 年 2 月)²⁾

解放民をめぐるアメリカ社会の動きについて、かなり詳しくは二人が書いたに於いては、いかにもステロタイプである。双方に 20 年の時間差があるにもかかわらず、書評はふたつとも (1) ジムが単純かつ「寛大」で迷信深く、(2) 南部黒人 (奴隷) の典型としてうまく描かれている、とする。これが当時のアメリカ・エリート知識人の目に映ったジムである。一般読者がジムをどう見たかは、言うまでもない。『ハック・フィン』は当時のアメリカ人が、黒人たちの表面的な姿を見て作りあげていた奴隷像を補強することになった。おきまりの黒人像を強化するのに手を貸したのである。

だが先にも触れたとおり、農場場面でのジムが単に笑いを誘うだけの存在ではないことを、現代の読者なら感じとる。奴隷 (解放民) をめぐる社会諷刺は地下水のように流れていて、当時の読者が気づかなかったか、深くは考えなかつただけである。

農場でのジムの言動にはらちもないものが多い。だが囚われの身たる彼にすれば、そうするしかなかった。彼の置かれた立場がそうさせたのである。トムから解放計画の説明を受けたジムは (ハックの言葉によれば) 「ほとんど訳が分からないことばかりだが、あんたたちは白人で俺よりはわかってるだろうと思うから納得した、トムの言うとおりにするよ」(309) と言ったことになっている。つまり妥協宣言である。ほんとうに納得したわけではないが、「子供たち」の解放ごっこに付き合おう、という大人の知恵である。そうする理由は明々白々だろう。

ジムを (架空の) 持ち主に返して 400 ドルせしめようとするフェルプス夫婦—彼らは敬虔で寛大なクリスチャンである—をはじめ、ジムを取り巻くのはリンチも辞さない南部白人である。ジムは奴隷社会の模範奴隷になるしかない。さもないと殺される。「凶悪なニガー」か、逆に「とんまで従順なアングル・トム」か、とい

2) “Mark Twain: Made in America” *Booklover’s Magazine* (February 1904):145-54; reprinted in *Mark Twain: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) 250.

う両極のステロタイプの中かで、ジムには選択の余地がなかった。

保身の必要に迫られていたジムの立場を念頭に置くと、肌は黒いジムだが「心のなかは白いんだ」(341) というハックの例の言葉も、補足説明が必要である。ジムは「本質的」に優しい、とばかりは言えないから。逃亡をあきらめ、負傷したトムを助けるために医者を待つほうが、安全なのである。危険きわまりない深南部で、どれほどの時間逃亡が可能だっただろう。主人に従順に従うことこそ、ジムの利益にかなう。トムから離れなかったからこそ 1000 ドルの値打ちがある、という医者の賞賛も受けることができた。(353) 農場での彼が黙して語らないわけも、余計なトラブルを避けるための知恵である。

身の保全を図るということなら、小説全編をとおして発揮されてきたジムの慎重さを読者に認識させるシーンが最後にさらりと書き込まれている。インディアン・テリトリにいっしょに出かけ、また冒険しようと懲りずに誘うトムに「金がない」とハックが応ずると、パップなら大丈夫だとジムが請け合う。第9章で川を流れてきた家のなかで見た男の死体が、パップだったから、というのである。ハック自身が見たがらなかったこともあるが、ジムは少年に死体の顔を見させなかった。その動機が興味深い。Mark Twain Encyclopedia 417ページの解釈に従えば、幼いハックへの配慮よりも、ジムが自らの逃亡を成功させるためだった、ということになる。ハックが小屋を逃げだしたのは、直接には父の暴力をおそれたからである。だから父の死を知った時点で、少年にとって旅は終了してもおかしくない。パップの死を隠したのは、ひとつには確かに生き延びるためのジムの計算だったのである。

逃亡奴隷としてのジムのこうした「賢さ」に批評家たちが気づくようになったのも、最近である。パップの死をめぐる今の議論も、L・ルービンが1967年に指摘したのが最初らしい。創作者たるトウエイン自身を含め、白人読者は長らくミンストレル・ショウの伝統の枠組みのなかでジムをとらえていた、とラルフ・エリソンは1958年に喝破した。だが、その枠組みを超えたジムの「威厳と人間的度量」(Partisan Review 25 [Spring 1958] 215) をトウエインは描き出しており、そこにこの作家の複雑さがある、とも慧眼の黒人作家は付け加えた。54年のブラ

ウン判決直後に有力文芸雑誌にこのエッセイを発表したエリソンの影響は大きく、文芸界にあってもその後の黒人像理解に寄与することになった。『ハック・フィン』批評、特にジムをめぐってその後 80 年代になって現れたフォレスト・ロビンソンや 90 年代のフィシャ・フィシュキンの議論には、エリソンのいう「敵地のスパイ」としての黒人像解釈が色濃い。つまり、白人中心の 19 世紀アメリカに生きた奴隷(解放民)たちは、「とんまでお人好しで寛大な」表面的従順さを装いながらも、その裏でしたたかに自己保存と利益確保を図ろうとした、そうせねばならなかった、という捉え方であり、かつまた黒人のそうした行動様式への共感である。白人世界という「敵地」に生きねばならなかった黒人たちが強いられた二面性への洞察である。現代の読者が「とんまでお人好しで寛大な黒人たち」という先の 19 世紀末の書評を越えられたのは、基本的に公民権運動以後のことなのである。

解放民とトウェインの「変化」

「敵地のスパイ」たるジムの二面性に気づいた現代の読者が、解放民の運命に思いをはせることになったのは自然だった。トウェイン自身は書簡や新聞記事で解放民について直接語ることは、あまりなかったようである。だが、解放後の奴隷を主人公にした優れた短編を再建期に執筆している。この時期、解放民に寄せるトウェインの思いには、共感と彼らの体験した苦難を白人読者に伝える必要がある、という意志が明快である。社会批評家としての本領がうかがえる。

短編「ほんとうの話」(“True STory” 1874) は、解放民と彼らを取り巻く白人社会との相互関係を描く点で『ハック・フィン』と並ぶ優れた作品である。短編の主人公レイチェルとジムは、奴隷売買による一家離散の苦しみを共有する。優しい夫と七人の子供に恵まれた彼女ではあったが、子供たちはやがて売り払われ、60 歳になるまでに彼女が再会できたのは、そのうちの一人だけ。

解放後、白人の若主人の元で働くレイチェルが、奴隷時代の辛酸と息子との劇的な再会を語るこの物語を貫くテーマは、黒人の「外観」と「内面」の乖離である。

また彼らの笑顔と陽気さに惑わされ、人生の苦勞とは無縁の「幸せな人たち」としてしか、彼らを見ない白人一般の貧弱な想像力であり、そして傲慢さである。

最後にレイチェルがつぶやく「私だって人生の苦勞と喜びを知っている」(“I hadn't had no trouble. An, no joy”)という言葉は、冒頭若主人が無邪気に口にしてしまった「60年暮らしてきて、なんの苦勞も知らないっていうのは、どうしたことだい」(“how is it that you've lived sixty years and never had any trouble?”)³⁾という問いかけと呼応するように仕組んである。人生を知らなかったのはレイチェルではなく、実は彼女の過去など気にもとめなかった主人その人だった。彼女にたいする皮相な問いかけが、頭上に放り投げたボールのように彼自身のうえに落下し、彼を恥じ入らせる。だからこそ、副題に“Repeated Word for Word as I Heard It”とあるように、彼は彼女の言葉を一言一句書き留めたのである。そこには黒人召使いへの自らの無理解にたいする反省ばかりか、自分たちが維持していた旧体制へのかすかな罪の意識さえあろう。この良心的主人が語りかける相手が、再建期白人一般読者であるのは言うまでもない。「陽気で愉快なニガー」という彼らの色眼鏡を、少しでも修正したいという「私」の思いには、時代を先取りした進歩性が感じとれる。農場場面を考えるさいの本論筆者のひとつの関心は、再建期終了から10年を経て、「ほんとうの話」で見せた解放民へのトウエインの共感に変化があったのかどうか、また変化したとすれば、どう変化したのか、というところにある。

解放民の運命を念頭においたアメリカ社会への諷刺が、農場場面に流れていることはすでに触れた。だが、それは容易に伝えられるわけではない。なるほど、社会問題に関心を寄せる少数の読者なら、気づいたかもしれない箇所があるにはある。たとえば第38章で、トムがジムに強要する家紋(「コート・オブ・アームズ」)である。ルイ14世の「落とし子」が37年間とらわれた後、ジムの小屋で亡くなった、という一見奇想天外な与太話。しかし、Harold Beaver 著 *Huckleberry Finn* (1987)

3) *Mark Twain: Collected Tales, Sketches, Speeches, & Essays 1852-1890* (New York: The Library of America, 1992) 578-582.

の指摘によると、37年という年月は解放前の奴隷たちにとって大きな意味をもった。1863年、奴隷解放令発布のわずか一月前にリンカーンは議会に対し、1900年に奴隷制を廃止するため、それまでの37年間を移行時期とし、廃止によって生じる損害は連邦政府が補填するという提案を行った。(ビーバー 46) あくまで戦争を避けたかった大統領は、奴隷制廃止が南部に与える打撃を考慮し、奴隷の人権よりも政治的配慮を優先したのである。白人側の都合によって解放を先延ばしされ、37年間囚われの身をかこつしかなかったかもしれない奴隷たち、囚われの自由黒人たるジム、それにジム・クロー体制が進行しつつあるなかで、実質的権利と自由を奪われつつあった半奴隷たる解放民の三者が重なりあうではないか。このエピソードは単なる与太話とは、やはり思えない。だが、それにしても込み入っている。判じ物である。よほどの知識がないと、作品発表当時は気づく人も希だったのではあるまいか。ジム・スマイリーの愛犬を「アンドリュー・ジャクソン」、飛びガエルを「ダニエル・ウェブスター」と名づけることによって、読者がパロディの対象を嫌でも気づくようにし向けた初期短編の直截さはない。笑いが厚い地殻となって農場場面を覆い、社会諷刺のマグマを押さえ込むようにカムフラージュされているから。

社会批判を覆う笑いという農場場面の構造は、作品全体と無論通底している。当初の構想では『ハック・フィン』は『トム・ソーヤの冒険』(以下『トム・ソーヤ』)の姉妹編と考えられていたようである。⁴⁾ このプランはやがて放棄される。だがその余韻はもちろん残った。だから扉を開けば「トム・ソーヤの仲間」たる「ハックルベリー・フィンの冒険」であることが謳われ、時代背景も前作に合わせて「40～50年まえ」(つまり、1830～40年代)と明示される。愉快で風刺的な笑いと冒険を前作で楽しんだ当時の読者は、その続編として『ハック・フィン』を位置づけたはずである。そうした期待に胸膨らませてページをめくると、やはり出てくる。アメリカ人が伝統的にヨーロッパにたいしていただくコンプレックスを逆手にとった、アメリカ的土着の知恵を武器として笑いを提供する、したたかな主人公の登場である。ヨーロッパ型モデルの追従者たるトムを、物語冒頭でコケにするハックの活躍

4) *Adventures of Huckleberry Finn* 1885: Berkeley: University of California Press, 1988)xxv

に、読者は痛快さと自らの少年時代へのノスタルジアをかきたてられただろう。さらに進んで「アメリカ人」たることのプライドを味わったかもしれぬ。

アメリカの土着性が礼賛されるなかで、ジムがあらわれる。深南部に売却されるのを怖がる奴隷の登場で、国家の汚点たる特異な制度が、当時の読者の意識に呼び覚まされただろう。だがそれは、読者自身が生きている時代ではない。すでに、あくまで過去の世界のできごとである。レイチェル同様一家離散に苦しみ、妻を買い戻して家族で暮らしたい（第16章）というジムの願いも、ハックの目を通してしか語られない。その願いを嫌悪するハックを見て、奴隷制社会の掟が少年の意識を縛り付けていることを、時代の文化がハックを「精神的奴隷」と化していることを読者は再確認する。悪しき教育が良心を支配する、というトウェインお得意の主張は理解されよう。視点が少年に限定されたおかげである。だが、よくよく考えると、そのことが逆に一般読者を同時代の解放民への関心から遠ざけた、ということもあるだろう——残酷な奴隷制もいまはなくなった、と。実際 UCLA 新版で、アメリカ版『ハック・フィン』が1885年2月に出版された直後の書評を見ると、今はすでに無くなった古めかしい時代を見事に記録したドキュメンタリ、40年前のミシシッピ川とその流域の文化を再発見させてくれる作品だ、という趣旨の書評が散見される。⁵⁾ (新版 760, 761) 当時の書評でジムをめぐるハックの内面的な葛藤がもつ意味についても言及しているものは、かならずしも多くないようである。多数の読

5) たとえばハートフォードの *Courant* に掲載された次のような書評が典型だろう。

Mr. Clemens has made a very distinct literary advance over Tom Sawyer Still adhering to his plan of narrating the adventures of boys, with a primeval and Robin Hood freshness, he has broadened his canvas and given us a picture of a people, of a geographical region, of a life that is new in the world. The scene of his romance is the Mississippi river. Mr. Clemens has written this river before specifically, but he has not before presented it to the imagination so distinctly nor so powerfully. Huck Finn's voyage down the Mississippi . . . is an adventure fascinating in itself as any of the classic outlaw stories, but in order that the reader may know what the author has done for him, let him notice the impression left on his mind of this lawless, mysterious, wonderful Mississippi, when he has closed the book. But it is not alone the river that is indelibly impressed upon the mind, the life that went up and down it and went on along its banks are projected with extraordinary power. . . .

者はすでに触れたとおりの反応しかなかった。

短編と長編を隔てる 10 年のあいだに再建期は終わった。解放民にたいしてアメリカ社会は無関心から冷淡そのものへと後退した。社会のこうした流れを、トウェインのふたつの作品は反映している。わずか数ページの短編にあふれるレイチェルの雄弁さが、スペース的には小説全体の三分の一を占める農場場面でのジムの沈黙と韜晦に取って代わられた。解放後間もない喜びと興奮そのままに、旧体制下での苦勞を語り尽くしたレイチェルとは対照的に、「自由」になるために二度解放されるジムは、まず読者に娯楽を提供するためのタイプと化さねばならぬ。社会批判は二の次である。笑いの背後に、社会、文化、政治への諷刺と批判を込めるのは、新聞記者としてデビュー以来世の動きを敏感に察知してきたトウェインに見られる特徴のひとつだが、問題は作品内部での笑いと諷刺（批判）との力関係である。読者を念頭に置きながら、両者のバランスを作家がどう表現したか、という点にこそ私は関心がある。その点で言えば『ハック・フィン』における解放民への作家の姿勢は、前作より後退している、と言わざるを得ない。

国を二分した戦の後始末をどうするかをめぐって生じた、デリケートな社会問題や政治問題を作品中にいかん表現するかをめぐり、トウェインは読者と読者の質を意識したはずである。「ほんとうの話」でレイチェルがあればほど直截に解放民の過去（奴隷の苦しみ）を語ったのは、ひとつにはトウェインがそうした問題を理解してくれる読者層を想定できたからだった。この短編は 1874 年の『アトランチック・マンズリー』11 月号に掲載された。本書第 4 章では、この雑誌が八年後の 1882 年に発表した「南部紀行」を紹介しておいた。南北双方に対してなるべく公平たろうとするレポーターを起用するという姿勢でもうかがえるとおり、東部の教養ある人びとを读者層とする文芸誌である。『赤毛布外遊記』で人気者とはなっても、『トム・ソーヤ』をいまだ執筆中で、小説家として東部での基盤が十分ではなかったトウェインは、『アトランチック』の読者に敬意を払った。なぜなら、自分の売りである「笑い」を提供することを意識しなくてもよかったから。編集者 W・D・ハウエルズとのやりとりのなかで、この雑誌の読者だけが「（「ユーモア作家」に、体に縋を

塗りたくり 15 分ごとにあらん限りのことをするよう求めることがないという、それだけの理由で) 私としてまったく静穏に向き合うことができる読者です。」(*Mark Twain-Howells Letters* 49) とトウェインは語っている。生真面目なトピックを扱っても、この雑誌の読者なら受容してくれることをトウェインは喜んだ。

「ほんとうの話」は『アトランチック』に掲載された彼の最初の作品となった。しかも 1 ページ 20 ドルという破格の稿料が支払われた。どちらもハウエルズの尽力と彼のトウェイン評価を共有していた社主ホートンのおかげという。(MTHL 25-6) 71 年以来雑誌の編集を任されたハウエルズが、どのような文学的傾向持っていたかをしのばせるエピソードのひとつに、『トム・ソーヤ』を連続掲載することをいちどは考えながらも、結局は放棄したことがある。代わりに 75 年には「ミシシッピ川の昔」を掲載することに決めた。『トム・ソーヤ』は自分が読んだうちで「最良の少年向け小説」だと評価しつつも、文芸誌たる『アトランチック』にはふさわしくないとの結論を出したからである。(MTHL 31) エマソン、ロングフェロー、ホイットィア、ストー夫人など、当時のそうそうたる文人を手がけてきたこの雑誌の読者は、「笑い」だけでは満たされないことを心得たうえでの処置だっただろう。

他方『ハック・フィン』は文芸誌の読者ではなくて、まず一般読者を念頭に置かねばならなかった。売るためである。まず笑いを求める読者の要望にトウェインは応える必要があった。先の UCLA 新版の書評には、「しばらくのあいだ、クレメンズ氏は真面目で立派な (“serious and fine”) 作品に夢中だった。『ハック・フィン』で彼は正気に戻り、再びむかしのマーク・トウェイン氏にもどっている……」(759) とコメントしたものが見つかる。「社会批評家」の顔ではなく、あくまで「ユーモア作家」としてトウェインがイメージされていたのがわかる。

多数派読者のそうした反応を、作者自身が誘発しているとしたか考えられない箇所が、作品冒頭に見つかる。「警告」 (“Notice”) がそうである。念のために引用する。

Notice

Persons attempting to find a Motive in this narrative will be persecuted; persons attempting to find a Moral in it will be banished; persons attempting to find a Plot in it will be shot.

By Order of the Author.

Per G . G ., Chief of Ordnance

“Motive”に「目的」(加島訳)をあてようが、「主題」(大久保訳)をあてようが、作品を分析するのは邪道です、というお上のお達しである。21世紀のトウェイン研究者たるわれわれは全員射殺される運命にある。警告を発したのはトウェイン自身ではなくて、彼の命を受けた「法令長官」ということになっていて、作家自身はいつもの通り韜晦癖を発揮して逃げの姿勢。

長官のイニシャルG・Gがさすのはグラント將軍だろう、と旧版では解説されたが、新版ではトウェインの執事だったジョージ・グリフォンという黒人ではないか、と紹介されている。彼は忠実にクレメンズ一家に仕えた召使いの鏡だった、という。クレメンズの悪口を通りて叫ぶゴロツキにむけて、発砲したこともあるほどの忠義ぶりを発揮した。(新版 376)作家と黒人執事を結びつけていたのは、南部的パターンリズムだろう。1880年の6月以降に、この「警告」は草稿に挿入されたい。1876年に川をくだる旅がかなりの部分完成してから4年後である。4年後にあえて作品全体を茶化するような「警告」を挿入したトウェインの意図はなにか。推察するしかないが、ひとつだけ言えば、現在の読者が読み取るような人種をめぐる真剣な社会批判を、トウェインが当時の読者から自作に期待したとは思えない。むしろ、そうした姿勢を読者がとることを避けさせようとしたのではないのか。

当時として安くもない小説を買ってくれる読者には、まず笑いを提供できなければならなかった。ユーモア作家というブランドを背負うトウェインの宿命である。そして農場場面以降、作家は実際にジムを笑い提供のための手段として用い、社会

批判は鳴りをひそめる。このことをケーブルとの朗読旅行と未完のいくつかの作品から眺めておこう。

朗読会旅行と「文学的エンターテイナー」

1884年11月5日のニュー・ヘイブンを皮切りに翌年二月まで4ヶ月、ニューイングランドや中西部を中心に、ケーブルはトウエインと朗読会旅行（「巡業」が実態に近い）をおこなう。トロントやオタワ、モントリオールといったカナダの都市も含め、80ほどの街で百回以上も朗読会を開いた。疲労困憊する朗読会旅行はやめた、と語った時期もあった（Lorch 162）トウエインだが、このときは必要に迫られていた。チャールズ・L・ウェブスター出版社を設立し、そこから『ハック・フィン』を出版するための投資が莫大だった。10年後、過酷な世界朗読旅行にトウエインはでかけるが、それも最終章で触れるように16万ドルの負債を残してこの出版社が破綻したことがひとつの原因だった。疫病神だったのである。

さて朗読会でトウエインは、84年までに執筆した自作から広範囲におよぶ抜粋をレパートリーとして用いたが、ケーブルとの関わりで興味深いのは、旅行直前になって『ハック・フィン』から、黒人が登場するどの場面を使えばよいかについて、ケーブルに助言を仰いだことである。（Lorch 168）ケーブルは第8章と、もうひとつは今話題となっている第14章を推した。いかにも解放民のために活動したケーブルらしい選択⁶⁾だった。どちらもジムの好ましい姿を彷彿とさせるから。

第8章は貧しい黒人仲間にも夢のお告げに従って、ジムが10セント投資する話、第14章は真の母はどちらの女かをめぐるソロモン王の話、それにフランス人はなぜ英語を喋らないかをめぐるトンチ問答である。教育を受けていないジムが、自ら

6) 第14章のエピソードをどのようにプログラムに載せるかについて、“Can't Learn a Nigger to Argue”は止めた方がよい、とケーブルはトウエインにアドバイスしたという。話の中身はそうでもないが、くだんのタイトルそのままをプログラムに載せるのは「不愉快」（“objectionable”）で下品な感じがするかもしれない、とケーブルは考えたようだ。いかにも生一本なケーブルらしい。Lorch 168 参照。

の言葉でハックと相対し、少年をたじたとさせる場面、言葉を武器に白人と渡りあい、勝利する場面である。ジムは頭がいいとハックはよく言うが、その典型例である。朗読会に来ていた白人聴衆にも受けた。(旧版 766)

このとき聴衆は自分たちの「笑い」になにを込めていただろう——「黒んぼ」はくだらぬ理屈をこねるものだ、というだけではなかつただろう。もっと辛口の笑いではなかつたか。言葉と理屈（屁理屈だが）でハックを負かすジムを見て、ジムの知恵に苦笑いした人もあつただろう。白人優位の常識がひっくり返されるのだから、笑ったあとで考え込んだ人もあつたろう。だが、こうした辛口の笑いはやがて微妙に変化したはずである。トウェインが出し物を変えていったから。

第 14 章のふたつのエピソードは、11 月以降クリスマス頃までよく使われた出し物だった。そのふたつに、クリスマス以後新しい出し物が加わる。冒頭で触れた例のフェルプス農場での話である。(旧版 785 グループ C) 囚われの「国事犯」として演技せざるを得ないジムが、ヘビやネズミを小屋に入れると(38 章)、クモが上から降ってくるので寝られず(39 章)、帽子のなかに隠したバターが暖められてハックの額に流れ落ち、それを脳ミソだと錯覚したサリーおばさんが「脳膜炎」に違いない(40 章)と騒ぐ。このドタバタ喜劇がプログラムでは「目眩(めくるめ)く偉業」(“Dazzling Achievement”)と銘打って印刷され、人気を博した。初演は 12 月 29 日。3 週間ほどした翌 85 年 1 月半ばにオリヴィアに宛てた手紙では、この出し物を「最初の一言から、最後の言葉まで・・・成功」だとトウェインは自画自賛した。そして「ソロモン」に代えて「目眩く偉業」をもっとも頻繁にプログラムの目玉として用いるようになった。(旧版 767)

朗読会の出し物をこうしてチェックすると、「笑い」の質変化について推察が可能となろう。つまり、ソロモン王のエピソードが引き起こした笑いとは微妙に違い、文学的セールスマンたるトウェインと潜在的読者である聴衆とは、旧態依然としたレーシスト的「笑い」によって結ばれるようになった、ということである。アメリカ本国での出版を 1 ヶ月後(2 月 18 日)にひかえた作家は、売り上げを伸ばすために、小説のどの部分が聴衆にアピールするかを大都会での朗読会のまえに、郡部

の小都市で6～10回も繰り返しテストした、という。(Lorch 163) もっとも受けの良かった部分を模索し、その結果を見て農場場面を選んで商品たる小説の販路拡張に努めたのである。小説では農場場面に解放民をめぐる社会批判を込めてはいたとしても、それをアピールするのではなく、空騒ぎを前面に押し立てて聴衆の関心を引いた。つまり、農場場面が朗読会で大評判になったということは、(1) 当時の読者がなにをおもしろがって笑ったのかということを一世紀の我々に語ると同時に、(2) 消費者がどのような「笑い」を求めているかを知り、彼らの願望を満たすべくセールスポイントのどれを提供するかについて余念がなかった、トウエインのしたたかな商才を証明している、と言える。これこそが「ソロモン」に代えて「目眩く偉業」がプログラムの目玉となった意味だろう。

『ハック・フィン』がアメリカで出版されたのと同じ1885年に、「人間の性格」(“The Character of Man”)というエッセーをトウエインは書いた。人間は勝手だという話なのだが、そのなかで、いまは言論の自由だ、独立だ、思想の自由だとわめいている南部の政治家だって、戦前、南部の支配階級にこびへつらい、奴隷制に反対した勇気ある人びとを罵倒していたではないか、いまは格好のいいことを言ってるが、自己矛盾に気づかないのか、と怒っている——悲憤慷慨する真面目人間サミュエル・クレメンズの面目躍如である。『ハック・フィン』がいまも読み継がれる理由のひとつは、こうした社会批評家の顔と愉快な冒険小説家の顔がバランスを取っているからこそである。ところが名作以後、ジムが登場する作品では、この社会批評家としての顔が見えにくくなる。営業政策第一の「文学的エンターテイナー」としての顔が前面に出る。そのひとつの現れがジムの変化だった。一人の知恵ある人間というより、誇張され戯画化された黒人像として読者に提供されるようになる。

トンチを失ったそれからのジム

それからのジムに話を移そう。『ハック・フィン』以後、トム、ハック、ジムの

三人組が出てくるのは主要なものでは次の三作品である。

“Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians” (1884、未完、以下『インディアン』)

“Tom Sawyer’s Conspiracy” (構想開始 1884、1897～1899 年にかけて執筆するも未完、以下『陰謀』)

Tom Sawyer Abroad (1894 以下『探険』)

ほかにも *Tom Sawyer, Detective* (1896) があるが、ジムは冒頭で触れられるだけである。『探険』は舞台がアメリカではないので、主に最初の二作品を考えたい。構想時期が『ハック・フィン』が完成したのと同時期だというのも理由のひとつである。

『インディアン』と『陰謀』に登場するジムは、奴隷州を舞台にした物語展開に色を添える「道具」のように見える。朗読会で聴衆を苦笑いさせたトンチを働かせることがない。ジムは黒んぼにしちやずいぶん頭がいいと、ハックは言ったし、『陰謀』でもキングが同じことを言う。だが、ふたつの続編でのジムは二人の賞賛を裏切る。『インディアン』についてはあとで補足するとして、『陰謀』でいちばん不可思議な点を考えよう。

なぜジムはトムの陰謀話にのったのか。この物語は「冒険」というには無謀すぎるトムの計画が発端である。北部から侵入した「廃止論者”(abolitionists)”が奴隷を逃亡させようとしていることにして騒ぎを起こそう、とトムが切り出す。ジムは奴隷を逃がせば「縛り首だ」(*Mark Twain’s Hannibal, Huck and Tom* 174) と反対する。もっともである。だが困ったトムが、俺が黒んぼになろうと申し出ると、ハックといっしょに納得してしまう。

そのあとが問題だろう。「教会に通う自分としては、キリスト教に沿わないことはできない。だから陰謀を行動に移すまえに、免許をもらってくれ」とジムはトムに求める。そこでトムはハックを加えた「三者協議会」なるものを開き、重々しく「ミ

ズーリ州とその周辺で一年間のあいだ、われわれが陰謀を企みたいものすべてについて、どんな陰謀を企んでもいい免許を与える」(176) とのたまう。ジムは喜ぶ。トムに感謝の気持ちを表す言葉も見あたらない、と書いてある。同じようにトムの話しに乗るとは言っても、『ハック・フィン』とは違う。

農場場面でのジムはトムに付き合っただけだった。ばかばかしいと思いつつも、囚われの我が身の安全のためには少年のわがままを受け入れ、「黒んぼ」役を演ずるのが最善だと判断した。奴隷とは、そのように振る舞うことを周りの白人から求められる存在だったから。だが彼は今や自由黒人である。少しは事情が変わってしかるべきだろう。『ハック・フィン』最終章の挿絵を見ると、二人の少年を両脇に従え、両手を片方ずつ少年たちの肩に置き、読者を見据えるように正面を向いたジムが登場する。(新版 360) この挿絵では、例えば前章第 42 章で白人たちに囚われ、うなだれた様子とは違い、ジムは大男で不敵な微笑みさえ浮かべている。逆に少年たちの子供っぽさが際立つ。弱者としての社会的束縛を解かれたジム本来の姿であろう。『陰謀』でのジムは最初から自由黒人として設定されている。奴隷として「演技」する必要なぞない。にもかかわらずトムの言いなりである。「廃止論者」がやって来た合図にラッパを吹いて人びとを怖がらせろ、とトムに命じられると、実際にラッパまで吹く……。ミズーリの片田舎では自由黒人とはいっても、不安定な身分だったことは認めるが、やはり不自然すぎる。

もう一つだけ、『陰謀』に描かれたジムについてテキストに沿って考えてみよう。

元気になって喜んだジムは悲しげだった様子もどこへやら、バンジョーをとり、牢に入ってからずっと歌っていた「ここには俺は長くねえ」の代わりに、「ジニーのトウモロコシパイが仕上がった」とか、自分の知っているいちばん陽気な歌を歌った——王様や公爵、「身を焼くような恥ずかしさ」がおかしいといつては死にそうなほど笑い転げる——そんなジムを見るとホッとした——激しく踊りまくり、子供の頃からこんなに若やいだ気分になったことがない、と彼は言う。(Huck and Tom 234)

トムとハックが留置場のジムに会いに来た場面である。王様と公爵の提案によってジムをいったん釈放してもらい、川を下ってケアロまで来たらジムを買い取り、イギリスに逃がすことに決めた——そう二人がジムに語る場面である。前作を知っている読者なら、ここでジムがなぜそんなに喜ぶのか首を傾げる。イカサマ師にたったの 40 ドルで売り飛ばされたジムは、二人組の正体を知り抜いているから。ところがバンジョーをかき鳴らして大喜び。なぜハックに怒ったように、トムに怒らないのだろう。いまはミス・ワトソンから給料さえもらっている身なのに。

ジムを川下に売るようにミス・ワトソンをそそのかした奴隷商人バット・ブランディッシュ殺害事件でジムに嫌疑がかり、彼が逮捕されたときトムは喜ぶ。「ジムは処刑されそうになるだろうが、無実を証明してやれば自分たちはセント・ピーターズバーグのヒーロになれる」、とも言う。『陰謀』という未完の作品は、フェルプス農場と同じく、幼稚というには余りに恐ろしい結果をもたらしかねないトムの気まぐれ冒険病の顛末記でしかない。犠牲者がジムなのも同工異曲。だが、トムの気まぐれのために命を落としかねないのに、ジムには抗議の言葉ひとつ与えられない。農場場面よりも、後退した姿しかみせないのである。

『ハック・フィン』がイギリスで出版された 1884 年、一説によれば 2 週間足らず(旧版 374) で書かれたとされる『インディアン』の未完成原稿でも、ジムはトムの冒険プランに従って西に旅する。インディアンの危険性をトムに警告するが、少年に逆に赤子の手をひねるように「説得」され、挙げ句の果ては目を輝かして聞き惚れる。(96) 貪欲、残虐卑劣にして狡猾なインディアンの「実態」を描くことがこの作品のテーマだから、ジムのインディアン評は正しかった。クーパー仕込みのロマンチックなトムのインディアン像は、白人娘ペギーにたいして彼らがふるったはずの暴力とレープによって破壊、否定される。だが、トムの誤りが明らかになったときも、少年に一矢報いる言葉はジムの口からは聞けない。ここでも囚われの身となったジムが救出されるまえに、物語は未完のまま終結するから。南部白人に代わり、今回ジムを捕らえるのはインディアンだが、少年たちがジムを救い出すために活躍するというパターンだけは踏襲されている。長編と同時期に書かれ、その続編とし

での地位を約束されていたこの作品でも、ジムの存在は少年たちに冒険を提供するきっかけでしかない。『陰謀』でも『インディアン』でも、オツムは弱いが気がよくて宗教心篤く、白人の言葉に従順な黒人としてしか登場しない。さきほど紹介した当時の書評にあるとおりの人物である。長編で見せたしたたかさ、ハックをうち負かした知恵が消え失せている。

ジムのトンチ消失、気のいい「黒んぼ化」はハック自身の沈黙と裏表になっている。フェルプス農場までは存在したジムとトムの濃厚な人間関係が、『インディアン』でも『陰謀』でも希薄である。川をくだる旅のあいだ、ハックは一人の人間としてのジムの内面をかいま見、黒人をめぐって認識を新たにする。ところが、『インディアン』でも『陰謀』でも、真剣なやりとりが二人のあいだにかわされることがない。相互理解や新発見のための基盤がそもそもないのである。

長編同様、ハックは「観察者」としての立場から、奴隷制社会セント・ピーターズバーグに住む人たちが、どんな人たちで、なにを考え、どう行動したかについて冷静に語りはする。北部からの「廃止論者」や奴隷逃亡への恐れ、あるいはジムのような自由黒人への警戒心などについてコメントする。だから話の展開次第では前作と同じように、19世紀アメリカを考えるために格好の素材が提供できただろう。

ところがトムの空想的冒険世界が強力な枠組みとなって作品を縛るために、ハックのコメントは広がりを持つことができない。ハックの役割は相対的に低下して社会批評的視点がかすんでしまう。深入りはしないが、『陰謀』のハックは運命論者になっており、その点、長編よりも行動力が鈍っている。いささか老人めいたハックと対照的に、探偵たることを自負するトムは『陰謀』では元気百倍でハックを圧倒する。おかげで、奴隷制社会における自由黒人のあり方をめぐって、『陰謀』はトウエインの社会派色を引き出す可能性を秘めていたはずだが、そうはならなかった。

『陰謀』より4年ほどまえ、次章で論じる『うすのろウィルソン』（1894）が上梓された。おなじように戦前の奴隷制社会を舞台とし、推理小説的色彩が強い作品である。だが、それでも少なくとも当初は社会性が前面に押し出され、語り手は全

知の視点に立って語る。奴隷制やそれに関連したトピックを正面から扱うとき、もはやハックの視点では不十分だったのである。南部社会のマージナルな視点たるハックは、社会問題と冒険世界をつなぎ合わせる接点としては最良の視点だった。だが、共同体内部を拡大観察する役目は年齢が 14、5 歳で教育を受けていない少年には荷が重すぎた。

終章で論ずるように、晩年のトウェインは正義感に基づいた社会批評家としての言動を強めた。数次にわたる海外旅行や異国での長期滞在に基づき、アメリカ国内の人種問題ばかりでなく海外における欧米諸国（特に大英帝国）の動きをめぐっても、批判精神を発揮した。異文化見聞が彼の見識を広げた結果である。もっとも彼の生きた時代の制約のなかでの話ではあるが。

こうした社会批評と同時に、老作家は取り戻すことのできないノスタルジアの世界を、思春期の少年たちの冒険をも忘れられなかった。欧米諸国の帝国主義政策にたいする批判がハックの土着的批判精神の延長線上にあるとすれば、成長することを知らないトムの遊び心も相変わらず生きていたのである。

繰り返せば、社会批評と無邪気な（だからこそ恐ろしくもある）冒険譚とがどうバランスをとるかは、彼の小説がもつトーンを決定する。『ハック・フィン』に話を戻せば、フェルプス農場にいたるまで、ふたつの基本的性格は共存した。だがフェルプス農場以後、三人組を用いてどのように物語の枠組みをつくるかをめぐり、トウェインが冒険小説に傾斜してゆくなかで、川を下っていたときのジムに彼が戻ることはなかった。平板な「タイプ」としての役割しか与えられなくなった。『インディアン』のなかでトウェインは、ふたたびジムを川下に売り飛ばそうとする白人がいたので、トムやハックといっしょの方がジムにすれば安全だった（93）とまでハックに語らせる。人種をめぐり、他愛ない冒険とは相容れない頑迷な価値観が生きる社会だったことが再確認されている。その社会を舞台にトウェインは三人組に固執した。「自由黒人」を二少年と共に行動させたのである。その結果、ハックと川を下ったときのように、ジムには自分自身を語るチャンスがなくなってしまった。

三人が気球に乗ってアフリカや中近東を旅する『探検』のなかでは、ジムがお得

意のトンチを使ってトムをタジタジとさせる場面が見られる。セント・ピーターズバーグを離れられれば、そのような知恵を発揮することができる。だが、町のそれではトムは思うように冒険を味わうことができない。町で彼と付き合うしかない立場のジムは、解放民の苦境を暗示する人物から、19世紀末アメリカ白人聴衆が求める陽気で愉快な「ニガー」へと矮小化されざるをえない。三人組を愛し、彼らの冒険と友情を長編以後もよみがえらせたいと願ったトウェインには、ジムをめくり狭い選択しか残されていなかった、と言うべきだろう。陽気でバンジョーをかなでる幸せな人たちだという、自分が生きた時代の文化を受け入れるしかなかったのである。

ジムはトウェインがもつ冒険精神と社会批判というふたつの性格のはざまで揺れる人物である。農場のジムが裏切られたように見えるからと言って、ヘミングウェイの苦言にあるように、トウェインが物語を誤魔化そうとした、というわけではなからう。トウェインのなかでは、人倫を説き、トンチでハックやトムを打ち負かすジムと、バンジョーをかきならすジムとは仲良く共存していた。時代の文化と作家との親和性はそれほど強かったというべきである。解放民をめぐるアメリカ世論の変化を、レイチェルから『ハックル・フィン』、そして『陰謀』にいたるジムの姿はそのまま映して出しているのだから。

農場場面が「誤魔化し」であるかどうかを決めてきたのは、人種をめぐる時代の文化の影響下にあって、いっそう際だつことになった作家の（現代から見ての）二面性には目をつぶり、冒険性よりは社会批判に重きを置いて、ジムのなかに公民権運動以降のリベラルな文化と価値観を読み込もうとしてきた現代読者だったのではないだろうか。だとすると、誤魔化されたと言って不満を語るのは、実は我々の無い物ねだりなのかも知れない。

書誌

- Anderson, Frederick(ed.) *Mark Twain: The Critical Heritage*. 1971: London: Routledge & Kegan Paul.
- Ellison, Ralph. "Change the Joke and Slip the York." *Partisan Review* 25 (Spring 1958)
- Hemingway, Ernest. *Green Hills of Africa*. 1953: New York: Charles Scribner's Sons.
- LeMaster J.R., and James D.Wilson (eds.) *The Mark Twain Encyclopedia*. 1993: New York: Garland Publishing Company.
- Leonard James, S., et al. *Satire or Evasion: Black Perspectives on Huckleberry Finn*. 1992: Durham and London: Duke U.P.
- Lorch, Fred W. *The Trouble Begins At Eight: Mark Twain's Lecture Tours*. 1968: Ames, Iowa: Iowa State University Press.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1988, 2003: Berkeley: University of California Press.
- Mark Twain's Hannibal, Huck and Tom*. 1969: Berkeley: University of California Press.
- Mark Twain: Collected Tales, Sketches, Speeches, & Essays 1852-1890*. 1992: New York: The Library of America.